

緑のまきば

1973. No. 8

小金井緑町教会
 小金井市緑町四一六一三三
 電話〇四三三—八—一七九六一
 編集 牧師 山本圭一

生きた礼拝

甞晴れて豁然とある山河かな

山本圭一

この開拓伝道を始めたのが昭和四十年の暮であつたから、ことして八年の年月を重ねた。思えばいろいろの山坂があつたけれども内外の多くの人々に助けられて、なんとか歩いてきたとしか言えないのである。ここへ来る時、私は秘かに一つのことを自分に言い聞かせた。それは、教会の使命は「福音の宣教」にあるのだから、このことを強いて口にすまいと言うことであつた。それには「伝道だ伝道だ」と言いながら、実際には牧師と一部の者だけがきりきり舞いして「笛吹けど踊らず」という実情に、われながら愛想をつかしていたからである。

に言つて、教会で出会うことは面食うことの方が多かつた。まあ自分の身近な生活のことは初めから裸一貫であつたから、何とか我慢できたし、多くの人々の厚意で支えられたことは、私にとつて本当に珠玉のような宝となつた。しかし何とも合点のいかないのが「伝道だ伝道だ」という掛声である。私はそういう声はどこかで上つて、自分には何とか目をつぶれたが、自分に差し追つてくると、何ともやりきれない気持ちになるのである。叱責したり、お前は意気地なしだとさげすんでみたが、平安を得ることはできなかった。そんな状態のまま小金井にきたのである。

I
 だから小金井に来て一体私に何ができるだろうかと祈り考えあぐむことが、このスタートになつた。その頃カルヴィンのことを幾分学び続けていたが、私の心を一番とらえていたのは、彼のバリー潜伏教会時代の礼拝であつた。小平尚道氏の書物より引用すると次のように記されている。

「カルヴィンをカトリックよりプロテスタントへ転向せしめたものは、フオルジュあるいは彼を中心とするバリー潜伏教会の教会生活ではないかと推測する。カルヴィンはプロテスタントの神学については、オリヴェータン、ヴォルマールから十二分に聞かされ、よく知っていた。そのうえ、このころのカルヴィンはルフェーブルの書を読み、フアーレルの動きを知り、ルターについても、エラスムスについても相当の知識を持っていた。しかし神学は彼をプロテスタントに踏み切らせなかつた。彼をプロテスタントに転向せしめたものは、フオルジュの生き方、もつと的確に言えば死に方ではなかつたろうか。」生きた礼拝のうちより人の生き方、さらに死に方までが創造されたということは、再度私をばげしくゆきぶつた。

II
 開拓の当初、ごたごたの多かつた中で「教会の生命と使命はキリストのみ言葉に聞き従う礼拝のうちより生れる。信徒は、主の日を聖別し礼拝を生活の基点となし得るよう、各自の生活設計を確立したい」とみんな確認しあつたことは、決して偶然のことではなかつた。それから、私にはみ言葉に正しく仕える重くかつ遠い道をみんなと一しよに歩かねばならなかつた。この人と今日、礼拝を共にしたという喜び。あの人が礼拝にこなかつたということの重さ。二つの不協和音が同時に自分の内でも共鳴しながら、その理由をあえて問うまいと思つた。心理的分析や状況的な思いやりに止ることが何と愚かであるか。それ自身神の創造的なみ業を拒む大罪であると自分を告発する声に圧せられた。と同時に、そこに献げられてゐる執成しの祈りの有難さに身がふるえたのである。

しかし礼拝する小さな群れに加わる者が、幼小生、中高生から成人に至るまで少しずつでも増え始めると、この群れへの負い目は多くなる一方である。(次頁へ↓)

さらに「この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない」(ヨハネ10章16)という主イエスのことばは響きを残して去らない。このご命令を直接誰が聞くことができようか。そんな無理なことを。まだまだそこまですの力も私たちには備わっていないんです。こう弁解したいのである。

ところが、こうした思いに反して、教会学校の陣容も少しは整ってきたし、青年会、婦人会も目標を定め組織を作つて歩み出そうとしている。教会の内でも、なぜ組織やグループが必要なのだろうか。今日の管理社会のマネをするのであれば、例のパーキンソン法則の批判をまつまでもなく、やがて組織が共同体の生命を枯渇させる時がくるに違いない。

しかし宗教改革の先達たちは、教会のオーダー(規範)だけを問題にすることはなかった。オーダーを問う時には必ず、Faith and Order (信仰と規範)と一息に取り上げたのである。もちろん時代と場所は非常に異なるけれども、私はその信仰の知慧に啓発された。言いかえるならばオーダーそれ自

身は、われわれの教会のみせかけの力を誇示するのではない。むしろ福音によつて罪と死より救われた喜びを伝えるためには、余りにも乏しく弱い私たちの姿であるからこそ、オーダーを求めるのである。われわれが話しあいを重ね、なすべき業を効率よく選択し、計画を綿密に立てる必要は、われわれが神の前には誠に弱い者であるからである。このとぼしいものを献げて神の栄光にあずかろうと願うばかりに、聖霊の導きを信じ共に一つ一つの教会の業に計画をもつて参与させていただったのである。

私はこの頃、四十代の後半になつて、ここに来た当初の「教会の宣教」に対する妙なこだわりが、自分の不信に由来したことを知つた。遅まきながら「宣教を行じよう」と思う。やはり自分自身が一番の難敵であるが、聖書のことばに触れてこおどりする瞬間が、小さい私を引きずつて下さる。

電晴れて豁然とある山河かな
鬼城の句が浮んでくるが、教会員名簿と小金井周辺の地図を前に、一人一人の顔を想い浮べながら心から安否を問い、主に在つて平安を祈る次第である。